

第102回日本精神神経学会総会

シンポジウム

アスペルガー障害のロールシャッハ・テスト ——スキゾイド・統合失調症との鑑別——

前田 貴記 (慶應義塾大学医学部精神神経科学教室)

アスペルガー障害の診断は、現在のところ症状と発達・生育歴から、あくまでも臨床的になされている。「対人的相互性の質的障害」が主たる症状とされるが、しばしば診断は困難であり、スキゾイド・統合失調症などの診断のもと不適切な治療がなされていることも多い。脳科学・認知科学など、様々な側面から研究が進められているが、未だに生物学的原因や病態は不明であり、客観的な診断方法は得られていない。研究を困難にしている一因として、臨床的にアスペルガー障害と診断された群が病因論的に均質ではないという点や、基本的障害が情緒面・共感性など精神機能の質的側面の障害であるために客観的・定量的に捉えにくいということもあろう。

我々は、ロールシャッハ・テスト (Rorschach Test: RT) を用いて、アスペルガー障害を含む広汎性発達障害 (PDD: pervasive developmental disorder) の診断について検討を進めているが、RTが他の心理検査・神経心理学的検査

に比して特に有用である点は、精神機能の質的側面 (情緒面・共感性など) について評価可能なことである。情緒面・共感性の異常所見として、(1) 情緒刺激 (色彩・濃淡) に対して全般的に反応性が低く、内容も貧困であり、情緒が未分化である。殆ど、快・不快に近いレベルにとどまっており、防衛も splitting 様の動きが見られやすい。(2) 共感性の指標とされている「人間運動反応: human movement response」が極めて少ない。みられたとしても、パターン化された形骸的なものが多い。視覚刺激に生物、特に人間の運動要素を認知できることは、他者理解において極めて重要な能力であると考えられ (筋肉運動感覚的共感)、重要な所見と思われる。神経心理学的にも、biological motion の運動認知との関連で興味深い。

アスペルガー障害の客観的診断方法がない現状においては、RTの臨床的意義もあろうか。特に統合失調症との鑑別の一助となればと考えている。

(この論文は、抄録集より転載しました。)